

南琉球諸語における多良間方言の位置づけ

下地賀代子 (kshimoji@okiu.ac.jp)

セリック・ケナン (kcelik@ninjal.ac.jp)

1. はじめに—多良間方言の言語系統—

1.1 多良間方言の系統に関するこれまでの議論

多良間方言は、その系統論的位置づけとして、古くから宮古語に下位分類されてきた（与儀 1934、崎山 1962、平山他 1967、中本 1984、上村 1997 など）。しかし、これらの研究は分類の基準を必ずしも提示しておらず、どのような言語学的根拠に基づく分類であるのかが明確ではなかった。

その後、共有改新という言語系統論の基準に基づいて多良間方言を位置づけるという研究が行われるようになる（ローレンス 2003、Pellard 2009、セリック 2020 など）。そのいずれにおいても、多良間方言が宮古諸方言と複数の共有改新を共有することを示し、宮古語に属すると結論づけている¹。さらに近年、同源語データベースを構築した上で語彙の同源関係をバイナリデータ化し、Neighbor-Net 法による系統ネットワーク分析を用いて琉球諸語の系統関係を定量的に検討した研究（セリック他 2024）も行われており、その分析でも多良間方言を含めた宮古語が明確に一つの言語群を形成することが示されている。

一方、狩俣 1997、かりまた 2000 は多良間方言が八重山語の下位に分類されることを主張している。その主張の根拠として、以下の点を挙げている。

—音声的特徴：母音融合の現象

—文法的特徴：サアリ系統の形容詞、オワル系の尊敬動詞の存在

—語彙的特徴：「砂糖黍」「虹」「蜻蛉」など

これらの根拠の多くは、言語系統論の観点に基づく先行研究によって、多良間方言の下位分類の指標とはならないことが示されている。例えば「砂糖黍」を指すスツジャという語について、ローレンス 2003 では、琉球列島での砂糖キビ栽培が 17 世紀以降だとされていることをふまえ、「多良間方言の系統を反映する語彙項目である蓋然性が低い」と述べている（p243）。

系統論的には、多良間方言は宮古語に下位分類されるといって間違いないだろう。だが、そもそもこのような位置づけの「揺れ」は、多良間方言が、共時的に他の宮古諸方言

¹ 共有改新の具体的な内容については各先行研究を参照されたい。なお、セリック他 2024 が、これらの先行研究によって提案されてきた南琉球の共有改新の例を表にまとめている（p100、表1）。

には見られない言語的特徴を有し、そのいくつかが八重山諸方言の特徴と類似していることによる。本報告ではまず、語彙タイプと文法の観点から多良間方言と宮古諸方言の共時的な相違について示す。また、系統論的にも多良間方言が宮古語に分類されることを再確認する。その上で、多良間方言は、宮古・八重山という大きな文化圏（言語圏）の中でそれぞれとの共通性を保ちながら変化、発達し、独自の姿になった言語であることを主張する。

1.2 議論の前提

具体的な内容の入る前に、本報告における議論の前提を確認しておく。

まず、本報告では、系統論的位置づけと言語間の共時的な近さを明確に区別している。系統論的位置づけとは、ある言語・方言が歴史的にどのような分岐過程を経て成立したかという問題である。これに対して、言語間の共時的な近さとは、現時点で観察される語彙・音韻・文法上の類似の程度である。

共時的類似は、祖語の古形の保持、並行変化や言語接触による収斂によっても生じうるものであり、実際の系統関係とは無関係に、見かけ上、別系統に近い印象を与える場合がある。つまり、2つの言語が共時的に似ていることは、両者が同じ下位群に属することを必ずしも意味しない。系統分類は、単なる類似の多寡ではなく、いわゆる「共有改新」（一度のみ生じ、垂直継承の結果複数の言語・方言に共有されている改新）の有無に基づいて行われなければならないものである。

以上の前提に立ち、宮古諸方言および八重山諸方言との共時的な近さと相違のあり方を考察するとともに、多良間方言の系統論的位置づけについても再検討する。

2. 語彙の共時的類似性の分析

2.1 分析方法

・主な使用データ

○宮古地域

1. 「宮古方言基礎語彙 a データ」（木部暢子編 2012 p161-193）

○多良間島

2. 下地賀代子編著 2017

3. 渡久山春英、セリック・ケナン 2020

○八重山地域（石垣、鳩間）

4. 宮城信勇 2003（「大琉球語辞典」<https://ryukyu-lang.lab.u-ryukyu.ac.jp/>）

5. 加治工真市著、中川奈津子編 2020、加治工真市・中川奈津子 2021、『オンライン版鳩間方言辞典』

・補足的に用いたデータベース

6. セリック・ケナン（2025）『日琉言宝』電子データベース

→次の地点のデータを補足的に参照 宮古：与那覇、砂川
八重山：川平、祖納、波照間

7. 前新 透 2011『竹富方言辞典』南山舎

8. 當山善堂 2024『黒島辞典—黒島の言語・諺・歌謡・習俗—』東洋企画

・分析の手順

- (1) 使用データの 1. (以下 ninjal_a_data)を excel データ化してこれに、多良間島 (2.、3.)、八重山地域 (4.、5.) の語彙を追加。
- (2) 各項目ごとに各地域の語彙を整理し、宮古で共通する語形、多良間、石垣・鳩間の語形を比較。多良間の語彙はどれに似ているか²を考察した。
- (3) 石垣・鳩間の語形が異なるなど、(2) の段階で判断がつかない項目について、6.～8. を用いて八重山の地点を増やし、多良間の語彙の系統タイプを考察した。

2.2 多良間島の語彙の分類

語源、語構成、共時態の形などの観点から、多良間の語彙は以下の 4 つに分類できる。

- ①多良間・宮古共通タイプ
- ②多良間・八重山共通タイプ
- ③多良間単独タイプ (宮古、八重山のいずれとも異なる)
- ④南琉球共通タイプ (宮古・多良間・八重山で同じである)

形が完全に一致していなくても、音韻対応から同系統であることが明らかな場合は「同じ」語形と扱っている。ただし、同源語性および音変化などの変数にしたがって、分類を精密化していく必要がある。

2.3 分析結果 (中間報告)

○ ninjal_a_data 分析対象項目数：188 (a001～a189、*a046「叔父たち」は除外)

—④南琉球共通タイプ：最も多、全体の 7 割ぐらい

※ 1 項目に複数の語彙が現れる場合、①～③のタイプを優先して分類した。

ex. a050 「美しい」→①にカウント

系統 1 「かげ」④南琉球共通タイプ：宮カギ／多カギ～／ハカイ～

系統 2 「あはれ／あはれげ」①宮古タイプ

宮古：池狩久来保伊国アパラギ～

多良間：アパラギシャーリ°

八重山：石アッパリ～、鳩アバレーン、竹アパレサン、黒アバレヘン

² バリエーションの変数は、同じ概念に対して同源語であるかどうかと、同源語がつかわれる場合、語形が一致・類似するかどうかのように分けて考察する必要があるが、本報告においてはこの点を厳密化することができなかった。今後の課題とする。

※1項目に複数の語彙が現れる場合、多良間に確認できないタイプは考察対象外とした。

ex. a177「土」→④にカウント

系統1「みた」④南琉球共通タイプ：宮ンタ〜ム°タ／多ム°タ／ハンタ〜ミツァ

系統2「ち・つち」*考察対象外

宮古：—

多良間：—

八重山：石ジウー、鳩シチ、竹ジー・チチ、黒ジー、波ジイー、

—①多良間・宮古共通タイプ：多い、全体の2割ぐらい

このタイプは、さらに次のように下位分類できる。

・下位タイプA：宮・多は同源、八は異なる

語例—a025 血、a057 姪、a061 皆、a066 蟻、a071 馬、a086 ウニ、a096 粥、a128 濡れる、a130 竜巻、a137 稲光、a156 夕方、a171 濁る、a181 汚い、など

ex. a057「姪」… 宮「み-をい」／ハ「をい」（宮ミューイ°・多ミウイ°／石ブイ）

a156「夕方」… 宮「よふ-さり」／ハ「よない？」（宮・多ユシャラビ／石ユネン）

・下位タイプB：南琉球で同源だが、宮・多と八で共時態が異なる

語例—a022 拳、a026 膿、a038 肛門、a043 お前、a044 お前たち、a068 カタツムリ、a089 塩辛い、a104 韭、a122 帯、a147 右、a152 霧、a174 砂、a180 埃、など

ex. a022「拳」… 「て-つくみ」（ローレンス 2003）

宮古系：国仲・砂川を除き「て-くつみ（音位転換）」から派生

八重山系：「て-つくみ」から派生

> て-くつみ[音位転換]… >ティフツム° (k>f, mi>m) 多

>ティヴツム° (f>v) 与・来・保・伊

>ティースム° (fの脱落, ts>s) 上

>ツフツム° (ti>tsi) 久 >チフン (tsi>tei, fの脱落) 島

(て-つくみ)… >ツズフム° (ti>tsi, ts<dz, k>f, mi>m) 国・砂

>ティーツクン (mi>n) 石 >ティツクン (tsiの促音化) 竹

>ティスクン (ts>s) 鳩

> ?シフク (ti>ei, s>f?, 語末nの脱落) 波

・下位タイプC：1項目に①タイプと④タイプの複数の語彙が現れる

語例—a001 頭、a015 首、a047 父、a048 母、a049 妻、a050 美しい、a051 夫、a102(お茶を) 捨てる・こぼす、a107 畑、a125 火、など

このタイプにはさらに、次のような語彙の現れ方の傾向が見られる。

1) ④共通&宮・多のみの語彙：a001 頭、a107 畑、a125 火、a047 父

—「頭」…共通つぶり系／宮・多かなまい系

—「畑」…共通はたけ系／宮・多はる系

—「火」…共通ひ系 [*宮では古い語] / 宮・多お-まつ系

a047 父について、語彙数が多く、上3つよりも複雑な体系となっている。

—「父」…共通いざ(-や?)系 [*宮・多では古い語]、(あ-)うや系 [*八では古い語]
/ 宮・多あさ系 [*八でも他の語彙の構成要素としてはある cf. ブザサ (叔父)]
(/八のみの語彙あ-じ-あ系、みき-うや系)

2) ④共通&宮・多と八で意味範囲が異なる語彙：a048 母、a049 妻、a051 夫、a102
(お茶を)捨てる・こぼす、など

—「母」…共通あむ-や(ま?)系 / 宮・多うば系 [*古い用法。祖母]

(/八のみの語彙：をなり(-おや)系、め-ども-うや系)

—「妻」…共通とじ系 [*宮は借用の可能性] / 宮・多め-ども系 [*女]

—「夫」…共通をと系 [*宮は借用の可能性] / 宮・多みき-ども系 [*男]

—「捨てる・こぼす」…共通すてる系、イタティル系 (語源?) / 宮・多アヲ
グ系 [*仰ぐ] (/八のみの語彙：こぼす系)

3) ④共通&宮・多と八で共時態が異なる語彙：a015 首、a050 美しい、など

—「首」…共通のど-くび系 / 宮・多 fugi—八 fubi [音位転換 (セリック 2020)]

—「美しい」…共通かげ系 / 宮・多あはれ-げ—八あはれ [語構成]

—③多良間単独タイプ：とても少ない、全体の1割未満

語例—a010 欠伸、a013 顎・顎の骨、a036 くるぶし、a069 猫、a079 卵、a085 貝、
a114 植える、a175 行く・去る、など

このタイプにはさらに、次のような語彙の現れ方の傾向が見られる。

1) 八・宮は同源、多だけ異なる語彙：a069 猫、a085 貝、a114 植える、など

—「猫」…多ねこ系 / 宮・八まゆ系 (多ニカ / 宮マユ・ハマヤ)

—「貝」…多? / 宮・八にな系 (多ヌシ / 宮ンナ・ハミナ~ミナン (*鳩、波))

[*多良間、宮古にはアサリ系の語彙も現れる。なお多良間では、辞書によって総称と
しているものが異なる (下地 2017 ヌシ / 渡久山・セリック 2020 アシャリ°)。]

—「植える」…多うゑる系 / 宮・八えべ系 (Pellard 2009, 2015) (多ウイリ° / 宮イビ~・ハ
イビルン)

なお、④タイプに分類した a035 「あし(脛)」の項目では「ふくらはぎ」と「すね」がお
そらく混同されて回答されており (ninjal_a_data)、「すね」の意の語彙についても追加で
分析対象とした。結果、「すね」の意の語彙もここに含まれる。

—「すね」…はぎ-ほね系 / 宮・八すね系 (多(カラ)パグヅブニ / 宮(カラ)スニ (*狩
俣、保良、仲地)・ハスイニ~シニ)

2) ④共通&多のみの語彙：a013 顎・顎の骨、a079 卵、a165 昔、a175 行く・去る、など

—「顎・顎の骨」…共通あご系 / 多くち-ほね系

[*宮古ではカマギダ (系統?、狩・来・砂・国)、八重山ではかくづ系 (石・

鳩・竹・租・波・カクジ〜カクチ)の語彙もそれぞれ用いられている。]

—「昔」…共通むかし系 (Jarosz 2015, セリック 2020) / 多か-ながい

—「行く・去る」…共通いく・はる?系 / 多とぶ系

[*とぶ系の語彙自体は宮古にも八重山にもあるが (ex. トゥビー仲、トゥブン石)、いずれも「行く・去る」の意味では用いられない。]

a079「卵」について、多良間で一般的な語彙はクガ (こが系) である。こが系の語は石垣 (クガ、歌謡語) と仲地 (クーガ、他地域にはなし) でも現れているが、宮古、八重山に共通する語彙ではなく、現在の使用度にずれがある。また、宮古のトゥヌカ、石垣のトゥナガは多良間でも借用ではあるが用いられており (トゥヌカ)、「④南琉球共通タイプ」に準じるものとしてここでは扱った。

—「卵」… (共通トゥナカ系 /) 多クガ系

3) 多と宮・八で共時態が異なる語彙: a010 欠伸 (Pellard 2009, セリック 2020)、など

—「欠伸」…共通: あくび系、共時態: 多 a:m / 宮 afuki~afutsi・八 akubi~aubi/akui

4) 地域的な系統がみとめられない語彙: a036 くるぶし、など

語. 宮アママ°プニ (<あまん-ほね) / 多ギダブニ (けぎ-ほね (セリック 2020)) / 竹クーラー (<くる-あ)、川ブグジャーマ (<?), 石パンヌサラーマ (<はぎのさら)、鳩カラシニ (<からすね)、

—②多良間・八重山共通タイプ: とても少ない、全体の1割未満

語例—a032 膝、a042 私たち、a070 鼠、a091 砂糖黍、a097 飯、a134 虹、a183 門、など
これらの7項目には、次のような語彙の現れ方の傾向が見られる。

1) 八・多は同源、宮は異なる: a070 鼠、a091 砂糖黍 (ローレンス 2003)、a134 虹、など

—「鼠」…八・多おや~系 / 宮よもの系 (石ウヤンチュ・多ウェーダ / 宮ユムヌ)

—「砂糖黍」…八・多? / 宮をぎ系 (石スウツァ・多スツジャ / 宮ブーズ)

—「虹」…八・多にじ系 / 宮はぶ (Pellard 2009) (石モーギィ・多ヌズ / 宮ティム°パウ)

ただし、いずれの項目でも、八重山・多良間の系統の語彙が宮古の一部の地域で用いられていることが確認されている (ninjal_a_data)。

cf. 「鼠」ウヤザ (与那覇で併用)

「砂糖黍」ツツァ (仲地、「かじるときのサトウキビ」に対して)

「虹」ニジ (来間、はぶ系は死語となっておりにじ系を借用)

2) ④共通&八・多のみの語彙: a042 私たち、a097 飯、a183 門、など

—「飯」…共通おぼん系 / 八・多いい系 (/ 宮古のみの語彙まい系)

—「門」…共通ちゃう系 / 八・多もん系

a042 私たちについて、3地域いずれも除活—包含の区別を持ち、このうち包含の形式が多良間と八重山で同じであることからこのタイプとしている。

—「私たち」…exclusive 共通わ-ぬ-た系 [*多良間ではアンタも併用]

inclusive 八・多わい-た?系 [*石垣はバガダ]

宮ドゥータ (与那覇・砂川)

3) 宮・多と八で共時態が異なる：a032 膝 (Pellard 2009)、など

—石垣・多良間 tsibusi/宮古 tsigasi~tsigusi [*石・多 bu—宮 gu~ga の音韻対応なし]

(cf. 「折る」石 buruŋ、多 bul、与 bui)

2.4 考察

現段階では概算に過ぎないが、多良間方言の共時的な語彙タイプで最も高い割合を占めるのは④南琉球共通タイプであり、全体の約7割を占める。次いで多いのは①多良間・宮古共通タイプで、全体の2割程度であった。一方、②多良間・八重山共通タイプ、③多良間単独タイプはととても少なく、それぞれ全体の1割未満であった。

今後厳密な分類が必要になるが、共時的な語彙タイプという観点において、多良間方言は宮古諸方言との類似性が最も高く、八重山諸方言との類似性は低い、とひとまず言えそうである。厳密な分類を行い具体的な数値に示していくことが今後の課題である。

3. 文法から見た共時的類似性と系統論的考察³

本節では多良間方言のいくつかの文法的特徴について、宮古と共通するもの、八重山と共通するものに分けてその類似性を示すと共に、形態論的な観点からの考察を試みる。

3.1 多良間と宮古で共通する文法的特徴

3.1.1 多良間と宮古の文法的な共有改新 (候補の提示)

A. 〈添加〉の助詞

宮古、多良間では mai が現れるのに対し、八重山ではンが用いられる (cf.)。 (1) は仲地、 (2) は多良間。琉球語全体での分布の状況から、宮古・多良間で mai に変わったと捉えられる⁴。

(1) アンマイ ッサン. (私も知らない。) 仲

(2) アンマイ イカ-マース. (私も行けばよかった。) 多

cf. バヌン ヴアイピサン. (私も食べたい。) 黒

B. 〈義務、予定〉の接辞

宮古、多良間でガマタ系 (gamata 池宮下、gumata 島野仲多⁵、gumuta 狩) が現れるの

³ 本節の各用例の出典については巻末の「用例出典一覧 (3節)」を参照。

⁴ Pellard 2009 によって、宮古・多良間 (=宮古語群) の共有改新の1つに加えられている。高橋 2011 は、「近世の琉球語 (先島諸方言)」における宮古方言の特徴の1つとして mai を挙げている (p29)。

⁵ -gamuta とも言う。また、-gumuta とも発音される。

に対し、八重山ではビキ系が用いられる (cf.)。 (3) は狩俣、 (4) は多良間。

(3) ッフォー ナスグムタ. (子を産むだろう。) 狩

(4) アタ マタ クマン カリ°トウ アウグマタ. (明日またここで彼と会うつもりだ。) 多

cf. ワー ハルビキー. (君が行くべきだ。) 石

C. -di に基づいた諸形式の動詞パラダイムへの定着

宮古と多良間では共通して、志向形、接続形 (確定条件) に -di に基づく形式が現れる。これらの形式には常に、話し手の「意思」というモーダルな意味が伴われており、-di に基づく新しい動詞パラダイムであると捉えられる⁶。

C-1 志向形

語幹-a (強変化)、語幹-i/-u (弱変化) の形とともに、宮古は -di、多良間は -dzi: のつく形が用いられる。 (5) は下里、 (6) は多良間。⁷ a が既存パラダイムの語形であり、b が -di に基づくパラダイムの語形である。

(5) a キューヌ ユーヤ アミノ ッフイウパズ ヤイバ、ピヤーシ ピラ。(今日の夜は雨が降るらしいから、早めに帰ろう。) 下

b ンニヤ ニツヌ アス°ノーカイバ、ピヤーシ ピラディ。(もう熱があるようだから、早く帰ることにした。) 下

(6) a ジュー ッヴァマイ マーツキ イカ。(さああなたも一緒に行こう。) 多

b アンマイ マーツキ イカズー。(私も一緒に行くよ。) 多

多良間の -dzi: には、ika-di si: > ika-dzi: (行こう) という派生が想定され、やはり -di に基づく形式であると考えられる。この ~di si: というくみあわせは他の宮古諸方言にも見られるものである。

cf. ウヌ ソーガツヌ クス バーンナ マーツカニーヤ ンヤ、ワーガモーマイ ファイミーディ スー {笑} ノーガモーマイ ファイミーディティ、{笑} (その正月が来る時には、待ちかねてね、豚も食べてみようとする。{笑} なんでも食べてみよう、{笑}) 下

C-2 接続形 (確定条件)

既存パラダイムの語形である「ヌミバ/ヌム°バ」(飲むから)、「ウキリバ/ウキリ°バ」

⁶ 既存パラダイムとは別に、-di 系の語形が生じているということである。宮古諸方言の一部では、志向形の -di に否定接辞 -an がついた -dja:n ~ -dza:n の形式も現れる (かりまた 2012 など)。なお、多良間には -di 系列の否定形はなく、話し手の否定の意志・判断を明示する形式としては -man が用いられる。

例. ム°マー ニューバ ムタジャー。(おばあさんは荷物は持たない。) 砂

ッヴァガ クトゥーパー イチウーガマイ バツシジャーニバ。(君のことはいつまでも忘れないから。) 下

cf. アンヤ キューヤ シャキウ ヌマム。(私は今日は酒を飲まない。) 多

⁷ 石垣方言にも -ディ が現れるが、用例から将前相の形式であると捉えられる。また、『石垣方言辞典』で確認できた用例は「~ディの重複+スル」の形式のみであり、構文的な制限もあるようである (cf. ヤラビヌ ナカディ ナカディ シーン。(子供が今にも泣きそうである。))

(起きるから)のように語幹に-(r)(i/i)-ba が伴った形とともに、宮古諸方言は、~di si:から派生した-dicciba (<-di ci-ba) の形式も持つ⁸。

- (7) アトゥカラ ンナ イッカイ デンワ スーディッシバ. (あとで、もう一度電話するから。) 下
- (8) クルモー アビリッフィーディッシバ スグ ビョーインカイ ピリ. (車を呼んであげるから、すぐ病院へ行け。) 下

多良間では-ddzi:、あるいは-ddza:⁹の形式が現れる。-ddzi:は-ddziba のように-ba を添えられるのに対して-ddza:はできない (*-ddzaba) ことから、前者は-di ci、後者は-di ci-ba が融合した形式であると想定される。

- (9) ナマカラ クッジー、マティーリヨー. (今から行くから待っていてね (電話で)). 多
- (10) ミイ°ーツ カーツジバ クヌ ム°ーマイ シェー ワーリ. (3つ買うからこの芋も添えて下さい。) 多
- (11) ハル=ガ トーケー ブラッジャー、アビラダカー ナラン. (ハルが1人(で)いるだろうから、呼ばないといけない。) 多

D. (痕跡) 結果相の形式

宮古と多良間では形態的に「シ(テ) オク」に対応する形式 (ex. numju:k₁ 保/numi: uki 多 (飲んでおく(飲んである))) が用いられるのに対し、八重山では「シ(テ) アリ」などに対応する形式¹⁰ (cf. nume:N (飲んである、石) が用いられる (cf.)). なお、平良など、宮古語の中でもシアリ系が現れる地域がある。(12) は下里、(13) は多良間。

- (12) ツクエヌ ワーグン ウツキウ ウキバ バガ サイフー トウイ キシッフィージャー
ンナ. (机の上においてあるから、僕の財布を取ってきてくれないか。) 下
- (13) アー オトーヤ シャキウ ンカギー ワーリー ウクス=ナー. (あーお父さんはお酒を召し上がったな。(父親の顔が赤いのを見て)) 多

cf. キューヤ メー イチマンポ アラゲーン. (今日はもう一万歩歩いている。) 石¹¹

E. 形容詞語根の用法

⁸ 中本 2010 では、連用形-ba、-dicciba に加えて-ttciba (<=ti ciba) 形式の接続形 (確定条件) も報告されている。

⁹ -ddza:の形式が確定条件として用いられる場合は少なく、主に文末で志向形のように用いられる。宮古(下里)にも同様の用法の-ddza:がある。

cf. ヅヴァガ ムティウバー アガ ムタツジャー. (君の分を私が持ちましょう。) 多

ンナ イフンティー、ブジ タキヨー、ファ、マイ° ファッジャードウ ((何回ご飯を炊くのと聞いたら)何回と(答えるから)、ちゃんと焚いてよ、ごはん食べるから(と)) 下

¹⁰ 鈴木他 2001 は石垣方言の結果相の形式について、「du によるとりたての形が numidu are:ri であり、補助動詞 aN がふくまれていることから、結果相の形が標準語のシテアルに相当することがわかる」と述べている(p41)。西表租納方言にも同様の現象が見られる(cf.クェール (借りてある)/カイキダル (買ってきてある)、金田 2009)。また黒島方言では、いわゆる五段動詞に対応する A 型動詞では「num-eer」(飲んでいる)、一段動詞に対応の B 型動詞では「nz-ijar」(出ている)のように、動詞の活用タイプによって現れる異形態が異なる(原田 2016)。

¹¹ 鈴木他 2001 より (p43、38)

taka- (たか-) など、活用型形容詞の語根のみの用法について、宮古と多良間は名詞修飾と述語となる用法のいずれもよく用いられるのに対して、八重山は述語となる用法はあまりない。以下は仲地、多良間、石垣の形容詞語根の用法の対照表である。

表1 仲地・多良間・石垣の形容詞語根の用法

		仲地	多良間	石垣
形容詞のタイプ		クアリ型	サアリ型	サアリ型
名詞修飾	語根+名詞	○	○	○
	重複形=nu ¹²	○	○	○
文の述語	語根+「むぬ」	○	○	—
	重複形のみ	○	○	—
	重複形と存在動詞	(○) ¹³	(○)	○
	重複形とコピュラ	○	○	—

(*下地(近刊)の表3より一部抜粋、改訂)

表1から、述語用法の発達程度の差は形容詞の活用型とは関係のない地域的な分布であり、少なくとも南琉球では、その語根の用法の地理的分布の差が生じた段階よりも後に活用型が成立したとすることができる。

また系統論的な観点から、名詞修飾と活用型について次のような流れが想定される。

- ・修飾方法1：語根+名詞 (<=日琉祖語における古い修飾方法)
 - >サアリ型 (<=琉球における改新)
 - >修飾方法2：語根サアル+名詞 <=改新

3.1.2 八重山語内の文法的な共有改新

F. 弱変化タイプの命令形

宮古と多良間の弱変化タイプの動詞の命令形は-ruで、「(食べ)ろ」に音韻的に対応する古い形式が保持されているのに対し、八重山の弱変化動詞の命令形は-ri (-re < *ro) に変化している (cf.)。 (14) は下里、(15) は多良間。

(14) ピヤースー ウキル。(早く起きろ) / クリユー ミール。(これを見ろ) 下

(15) ペーペー ウキル。(早く起きろ) / クルー ミール。(これを見ろ) 多

cf. アツツアー パイシャ ウキリヨー。(明日は早く起きなさいよ。) 石

G. 否定中止と過去否定 (動詞)

¹² いずれの方言でも重複形に助詞=nuを伴う形式が併用されている。狩俣 1997b(p.411)が指摘しているように、この「重複形=nu」は北琉球諸方言には見られない形式であり、南琉球諸方言の形容詞の特徴の1つと言えそうである。

¹³ 仲地方言では jaz の他に az もコピュラとして用いられ、多良間島方言の存在動詞とコピュラは同形であることから、「(○)」としている。

宮古祖語では、*-da(na)という否定中止形が再建され、それが多良間を含めた宮古語の過去否定形の元となる¹⁴。宮古の動詞の過去否定形は、「否定中止形を作る-da とその後続するコピュラの過去形から成る構文に由来すると考えられて」(セリック 2020:110) おり、多良間の過去否定でも同様の形が現れる。この否定の-da(na)は琉球祖語に遡ると思われる形式である¹⁵。(16) (17) は野原、(18) は多良間。

(16) アンガー アサムヌーバー ファーツタム°. (<fa:-**datam**) (姉さんは朝ごはんを食べなかった。過去否定) 野

(17) ス°ス°ウー ニーダナシー ノーユガ ニーリヤー? (魚を煮ないで、何を煮るの。否定中止) 野

(18) アンヤ イ°ザダタム°. [an=ja iz-**adatam**] (私は言わなかった。過去否定) 多

これに対して、八重山諸方言における形式を検討すると、八重山祖語では、否定中止が*-naとして再建され、過去否定形もそれに基づく。これは八重山語の共有改新であると考えられる。

(19) タローン メーダ ウクナーッタ. (誰もまだ起きなかった。過去否定) 石

(20) ナダ ピウティジウン ウタサナー カラナキウ シー. (涙一粒も落とさないでから泣きをして。否定中止) 石

H. 「する」の否定形

宮古、多良間では動詞s- (する)と強変化タイプ (kakI, kakan, kaki「書く、書かない、書け」など)で否定形の接辞が異なるのに対して (ex. 多: sj-**un**/kak-**an**)、八重山ではいずれも-anuになっている (cf. 石: s-**anu**/kak-**anu**)。

宮古、多良間における形式が古い形式であると考えられるのに対して、八重山ではlevilingが生じていると考えられる。

3-2 多良間と八重山で共通する文法的特徴

多良間と八重山で共通している文法的な特徴もある。ただし、これらは果たして共有改新であるかどうかを検討する必要がある。先に結論を述べると、これらは共有改新として位置づけられない、あるいは可能性が低いと解釈する。

I. 尊敬語の形式

一般動詞を尊敬語化するのに、八重山と多良間ではオワル系の形式が用いられるのに対し、宮古ではサマイ系の形式が用いられる (cf.)。オワル系の語が古い形式であること

¹⁴ なお、今の多良間の否定中止の形式は共時的には「~n-gutu (～ないで)」であり、-daの形式が否定中止で用いられるのは「~**da**: burain (～ないでられない)」という慣用表現に限られている (セリック 2020:111)。

¹⁵ 『沖縄古語大辞典』(角川書店、1995)に、それぞれ「打消の助動詞」「打消の意の接続助詞」として「だ」「だな」が立項されている (p380,p398)。「おもろさうし」に例が見られることから、*-da(na)は琉球祖語から継承された形式であると考えられる。

は、すでに多くの先行研究によって指摘されている。(21)は石垣、(22)は多良間。

(21) シューヤ カマカラ パリオールソー. (お父さんは向こうから走っておいでになるよ。) 石

(22) ジュー、アガリー ワーリ. (さあ、(家の中に) 上がって下さい。) 多

cf. ニガイマニヤーン ウムキマニヤーン ホウヤグミヤー タスキー フィーサマイ. (祈願した通りに、思った通りに神様は助けて下さる)。池

J. 形容詞の活用型

八重山と多良間でサアリ型であるのに対し、宮古ではクアリ型である (cf.)。

(23) ツファサーリヤ トゥーリウ ツキリ. (暗いから明かりをつけなさい。) 石

(24) アタマイ ヌフシャーティカー パルンケー イカイズー. (明日も暖かければ畑へ行けるだろう。) 多

cf. ツヴァガ ハウスカイティガー フィーンマイ ユヌムヌ. (君が欲しいなら上げてもいいよ。) 池

共有改新を見極めるためには琉球祖語の再建が前提となるのだが、形容詞の活用型については現時点では不明である。だが、その分布のあり方から、少なくとも肯定形についてはサアリ形が琉球祖語においてすでに無標の形式になっていた可能性はあると考える¹⁶。その場合、形容詞の活用型(肯定形式)が八重山・多良間で共通しているのは、古い状態の保持でしかなくなる。

ただし、否定形式は、八重山と多良間では語根-サ、宮古では語根-クの形式が「～ない」に相当する補助動詞とくみあわさって作られる。北琉球で主に語根-クが用いられることから¹⁷、否定形式については上記の可能性は当てはまらない。今後の課題である。

(25) キューヌ カティムノー ドウグ カラサー ネーヌ. (今日のおかずはあんまり辛くない。) 石

(26) ムットウ ウムツシャ ネーン. (まったく面白くない。) 多

cf. ガバマス^oザ ム^oマツファ ニーン. (古米はおいしくない。) 仲

K. 第二過去の有無

八重山と多良間には、発話時現在には関わらない過去の出来事を表す形(第一過去)と発話時現在に何らかの関わりを持つ過去の出来事を表す形(第二過去)の区別がある。宮古では第二過去の形は現れない (cf.)。 (27)は石垣、(28)は多良間。それぞれの a が第一過去、b が第二過去。

¹⁶ 「おもろさうし」に現れる形容詞は「～さ」の形が最も多く、動詞アルとともに命令表現などを形づくっていたことから(『沖縄古語辞典』)、「(たか)さ ある」という構文自体の成立は琉球祖語に遡る可能性がある。

¹⁷ 津波古 1986 によると、北琉球でも渡名喜島、久高島では語根-サが用いられるようである (p2, cf. takasa ne:N 渡名喜, θakaθa na:N 久高)。

- (27) a ミーティナディ カウダ. ((その脱穀機は) おとし買った。)
 b キッサ カイッタ. ((その脱穀機なら) もう買ったよ。) 石¹⁸
- (28) a ユビ ヤーヤキヌ ウキタリ°ティーヨー. (夕べ火事があったってよ。)
 b ヤットウシー アミヌ アガリッタ. (ようやく雨があがった。) 多
- cf. a' ガウラー クヌドゥ フォータス°. (ニガウリは昨日食べた。)
 b' チャーヤ ンナマドゥ ヌム°タス°. (お茶はさっき飲んだ。) 砂

なお、第二過去の形式には地域による違いがあり、石垣、多良間では促音化しているが、小浜、鳩間では「-シタ」で現れる¹⁹。以下は小浜。なお、以下の例については、意味的に第一過去との区別がないように見える。

- (29) ガッコーカラ カイリシタ? (学校から帰ったの?)
 ムールカティ カイリ ハリシタ. (みんなで帰って行った。) 小

共時的に見ると宮古諸方言に第二過去は現れないが、この形式はシテ中止形と同じ分析的構文に由来するものであり、八重山・多良間の共有改新ではない可能性がある。詳細は次節で示す。

3-3 まとめと考察

多良間と宮古、多良間と八重山で共通する文法的特徴は次のようにまとめられる。

表 2 共時的な文法的特徴の一致／不一致

	宮古	多良間	八重山
A. 〈添加〉の助詞	-mai	-mai	-n
B. 〈義務、予定〉の接辞	グマタ系	グマタ系	ビキ系
C. -di に基づいた諸形式~	志向,条件,否定	志向,条件	—
D. (痕跡) 結果相の形式	シオク(/シアリ)	シオク	シアリ
E. 形容詞語根の用法	名詞修飾○・述語○	名詞修飾○・述語○	名詞修飾○・述語△
F. 弱変化タイプの命令形	-ru	-ru	-ri
G. 否定中止と過去否定	-da(na)	-da	-na
H. 「する」の否定形	-un	-un	-anu
I. 尊敬語の形式	サマイ系	オワリ系	オワリ系
J. 形容詞の活用型	クアリ型	サアリ型	サアリ型
K. 第二過去の有無	—	○	○ (~△)

¹⁸ 鈴木他 2001 より (p30, 34)。

¹⁹ そのほか、黒島方言ではハケツ(書いた)、波照間島方言ではカキャン(書いた)となる。第二過去形に関する報告は多くなく、分布状況や意味用法など不明な点が多い。又吉 2010 によると「-シタ」の形が現れる地域は石垣島川平、小浜島、西表島の古見に限られるようである。鳩間島にも「-シタ」の形は見られるが(加治工他 2022b)、直前過去の意味を表す形式であるかどうかははっきりしない。また「-ッタ」の形は、川平をのぞく石垣島各地と竹富島に現れる(又吉 2010)。なお、竹富島方言の第二過去(西岡・小川 2011 では「完了形」)は連用形+「ター」の形である。

さらに、系統論的な観点からの分析結果を箇条書きで示す。

- ・多良間と宮古の文法的な共有改新（→多・宮が変化した結果、多・宮一八で不一致）
 - A. 〈添加〉の助詞
 - B. 〈義務、予定〉の接辞
 - C. -di に基づいた諸形式の動詞パラダイムへの定着
 - D. (痕跡) 結果相の形式
 - E. 形容詞語根の用法 (?)
- ・八重山語内の文法的な共有改新（→八が変化した結果、多・宮一八で不一致）
 - F. 弱変化動詞の命令形
 - G. 否定中止と過去否定
 - H. 「する」の否定形
- ・宮古語内の文法的な共有改新（→宮が変化した結果、多・八一宮で不一致）
 - I. 尊敬語の形式
 - J. 形容詞の活用型
 - K. 第二過去の有無
- ・多良間と八重山の文法的な共有改新（→多・八が変化した結果、多・八一多で不一致）なし

表2から、多良間と八重山で共通する文法的特徴はI~Lの3つであることが分かる。だが、箇条書きにも示したように、これらは多良間の系統につながる特徴とは言えない。

まず「I. 尊敬語の形式」は、先に述べたように、オワル系の尊敬語形式 (<owar-) 自体は琉球の古い形式に過ぎず、逆に多良間を除いた宮古のサマイ系 (- (s)amai) が明らかな改新である。よって、八重山・多良間の owar- は古い形式が保持されたものであり、系統的な分布を考える上での指標とはならない。

また「J. 形容詞の活用型」についても、琉球諸語全体におけるサアリ活用・クアリ活用の分布からして、琉球祖語の段階では、少なくとも肯定形においてはサアリ活用も再建しておく必要がある。したがって、肯定形の八重山・多良間がサアリ活用であることは古い特徴の保持でしかなく、Jの尊敬語形式と同じく、系統論的な指標とはならないと言える²⁰。ただし、否定形については、多良間と八重山の共有改新、あるいは単なる並行変化のいずれの可能性も考えられる。

「K. 第二過去の有無」については、共時的に見ると宮古諸方言に第二過去は現れない

²⁰ 逆に、多良間を除いた宮古語の肯定形がクアリ活用だけになっていること自体が一種の改新と見なされるべきものである。これは、多良間を除く宮古諸方言が系統的に近いことも意味する。

が、(30) に示すように、この形式はシテ中止形と同じ分析的構文に由来するものである。

(30) シテ中止：シアリ-して kak-itti < kak-i-sjite

第二過去：シアリ-した kak-itta (多,石) < kak-i-sjita (小,鳩)

よって、両形式は切り離して考えるべきものではなく、その分布を明らかにした上で、論じる必要がある。以下の表3に両形式の共時的な分布を示す。

表3 南琉球にけるシテ中止形と第二過去の分布

	八重山	多良間	その他の宮古	池間・伊良部
シテ中止 (シアリ-シテ)	✓	✓	✓	×
第二過去 (シアリ-シタ)	✓	✓	×	×

上記の分布から、まず、シテ中止形は宮古祖語および南琉球祖語で再建する必要がある形式であり、池間・伊良部ではこの形が失われていると解釈することができる。そして、南琉球祖語においてすでに「シアリ シテ」という構文が成立していたのであれば、「シアリ シタ」も成立していたという想定が成り立つ。つまり、南琉球祖語にはシテ中止と第二過去の両形式とも成立しており、表4の共時的な分布は以下の2つの変化を想定するだけで説明することができる。

—池間・伊良部・宮古で、第二過去が消失

—池間・伊良部で、シテ中止が消失²¹

このように、第二過去には、八重山・多良間の共有改新であるという解釈以外の解釈も成り立つことが分かる。その他の語彙や文法の特徴に多良間と宮古の共有改新の方が圧倒的に多く見つかっていることから、やはり、第二過去を八重山と多良間の共有改新と見る解釈の蓋然性は低いと言えるだろう。

以上の考察から、文法的共有改新から見た系統についての結論として、J~Lのいずれも八重山・多良間の共有改新とみなす必然性はなく、冒頭で示した両言語を系統的に近いとする論拠は、“少ない”上に“弱い”(=共有改新でない別の解釈が成り立つ)とすることができる。

4. まとめ

以上の分析・考察を踏まえ、南琉球諸語における多良間方言の位置づけについて、次のように結論づける。

²¹ 実際、第二過去と過去形が意味的に区別されていないように思われる例が小浜方言に見られた(29)。この形式自体が現れない八重山諸方言もあり、南琉球全体で第二過去は消失傾向にあると考えられる。

- 1) 系統論から見て、語彙でも文法でも多良間は他の宮古と単系統である。
- 2) 多良間は最初に分岐したと考えられ、その結果、多良間には、多良間を除いた宮古諸方言がもつ共有改新をもたない場合がある（例：尊敬語形式）。
- 3) 上の2)の結果、多良間方言には“古い特徴”を宮古よりも保っている、と言える面がある。文法的な特徴で言うと、今回取り上げたI~Kは、多良間と八重山に共通する共時的な特徴となっていた。（→多良間方言としての「独自性」と言えるか）。

今回の報告は、語彙の分析が十分でなかったことが大きな反省点である。「宮古方言基礎語彙b データ」（木部暢子編 2012）も考察対象とする予定だったが、時間の都合で含めることができなかった。また、多良間方言だけに見られる言語的特徴についても触れられなかった。今後の課題としたい。

【謝辞】

本研究は、JSPS 科研費（課題番号 23K00493、25H00472）の助成および国立国語研究所共同研究プロジェクト「消滅危機言語の保存研究」（代表山田真寛）による支援を受けている。

【用例出典一覧（3節）】

宮国：「宮古方言文法項目データ」（木部暢子編 2012）

砂川：「宮古方言文法項目データ」（木部暢子編 2012）

下里：中本 2010、2014、加治工 2016、国立国語研究所 2008

（*報告者による意識を行なっている。また本稿の表記に変更した。キィ°・クィ°→クス、スイ°→ス、ツイ°→ツ）

野原：「宮古方言文法項目データ」（木部暢子編 2012）、狩俣 2022

仲地：富浜 2013（「大琉球語辞典」）

池間：仲間他 2025

多良間：下地編著 2017

石垣：宮城 2003（「大琉球語辞典」）

小浜：デイビス 2019

竹富：前新 2011

鳩間：加治工・中川 2020、2021

黒島：當山編著 2024

【参考文献】

上村幸雄 1997「琉球列島の言語（総説）」亀井孝他編『言語学大辞典セレクション 日本列島の言語』三省堂、pp. 311-354

- 加治工真市 2016 「南琉球方言概説」『琉球の方言』44、pp.40-107、法政大学沖縄文化研究所
加治工真市著、中川奈津子編 2020 『鳩間方言辞典』国立国語研究所 言語変異研究領域
(<https://www2.ninjal.ac.jp/hatoma/>)
- 加治工真市・中川奈津子 2021 『鳩間方言 音声語彙データベース』(<https://doi.org/10.15084/00003209>)、『オンライン版鳩間方言辞典』(<https://ninda.ninjal.ac.jp/s/hatoma/about>)
- 金田章宏 2009 「沖縄西表島(祖納)方言の格ととりたての意味用法」『琉球の方言』33、
pp.19-63、法政大学沖縄文化研究所
- 狩俣繁久 1997a 「宮古方言」亀井孝他編『言語学大辞典セレクション 日本列島の言語』、
pp.388-403、三省堂
- 狩俣繁久 1997b 「八重山方言」亀井孝他編『言語学大辞典セレクション 日本列島の言語』
pp.403-413、三省堂.
- 狩俣繁久 2007 「宮古保良方言の条件形」『南島文化』29、p.41-62、沖縄国際大学南島文化研究所
http://purl.org/coar/resource_type/c_6501
- 狩俣繁久 2022 「宮古島市上野野原方言の動詞活用形調査の資料」『シマジマのしまことば』
3、pp.219-247 (<https://kikgengo.ryukyuanlanguages.org/wp-content/uploads/2022/12/9334d0c272dcab5cbc4458133a6eb5f4.pdf>)
- かりまたしげひさ 2000 「多良間方言の系譜—多良間方言を歴史方言学的観点からみる—」『沖
縄県多良間島における伝統的社会システムの実態と変容に関する総合的研究』、pp. 27-37、
琉球大学法文学部
- かりまたしげひさ 2003 「沖縄県宮古郡城辺町保良方言概況」, 「第1次調査[全体的なコメント]」
文部省科学研究費補助金研究成果報告書 No.4 『方言における動詞の文法的カテゴリーの類型
論的研究』 pp.80~82, 339~340
- かりまたしげひさ 2012 「宮古語の動詞活用—代表形、否定形、過去形、中止形—」木部暢子編
2012 所収、pp69-107
- 木部暢子編 2012 『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 南琉球宮古方言調査報告書
(国立国語研究所共同研究報告 12-02)』国立国語研究所 (<https://repository.ninjal.ac.jp/records/2472>)
- 国立国語研究所 2008 「沖縄県平良市 1978」『全国方言談話データベース 日本のふるさとこと
ば集成 第20巻 鹿児島・沖縄』 pp.188-242 (<https://doi.org/10.15084/00002260>)
- 崎山 理 1962 「琉球・多良間島、水納島方言の音韻」『音声の研究』10、pp.287-305.
- 下地賀代子編著 2017 『つかえるたらまふつ辞典—多良間方言基礎語彙—』多良間村教育委員会
- 下地賀代子 近刊「南琉球諸方言の形容詞「語根」の用法—伊良部仲地方言、多良間島方言、石
垣方言を対照して—」野田尚史、日高水穂共編『日本の言語・方言の対照文法』、和泉書院
- セリック・ケナン 2020 『琉球宮古語史』(学位論文、京都大学文学研究科)
- セリック・ケナン、麻生玲子、松波雅俊 2024 「琉球列島における遺伝系統樹と言語系統樹の比
較に向けて—言語系統樹の客観的作成手法を検討する—」『日本言語学会第168回大会予稿
集』 pp.98-104

- 鈴木重幸・宮良安彦・登野城ルリ子・狩俣繁久・島袋幸子 2001「石垣方言の位置づけ」『琉球八重山方言の動詞の研究』、pp.10-100（平成 11~12 年度科学研究費補助金研究成果報告書、JP11610438、研究代表者：鈴木重幸）
- 高橋俊三 2011「琉球言語史構想（その 1）」『沖縄国際大学日本語日本文学研究』16 (1), 左 1-36
- 津波古敏子（1986）「沖縄中南部方言における形容詞形態論の輪郭（上）」、『沖縄大学紀要』3, pp.1-39, 沖縄大学.
- デイビス、クリストファー 2019「沖縄県竹富町小浜島・八重山語小浜方言の動詞の活用について」（平成 30 年度 文化庁委託事業『危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究』報告書）p192-209
- 當山善堂 2024『黒島辞典—黒島の言語・諺・歌謡・習俗—』東洋企画（<https://doi.org/10.15084/00003108>）
- トマ・ペラル、林由華 2012「宮古諸方言の音韻—体系と比較—」木部編 2012、pp13-51
- 富浜定吉 2013『宮古伊良部方言辞典』沖縄タイムス社*
- 宮城信勇 2003『石垣方言辞典』沖縄タイムス社*
- 仲間博之、田窪行則、岩崎勝一、五十嵐陽介、ダニエル・ワイマーク、中川奈津子 2025『南琉球・宮古語 池間方言辞典：西原地区版 第 3 版』国立国語研究所（<https://doi.org/10.15084/0002000466>）
- 中本 謙 2010「宮古島市平良字下里方言の原因・理由表現」方言文法研究会編『全国方言文法辞典資料集(1) 原因・理由表現』、pp.119-128(科学研究費補助金「『全国方言文法辞典』のための諸方言の文法に関する対照研究」(課題番号 19520403、研究代表者 前田直子)研究成果報告書)
- 中本 謙 2014「沖縄県宮古島市平良下里方言」方言文法研究会編『全国方言文法辞典資料集(2) 活用体系』、pp.146-154(科学研究費補助金「日本語諸方言の文法を総合的に記述する『全国方言文法辞典』の作成とウェブ版の構築」(課題番号 21320089、研究代表者 日高水穂)研究成果報告書)
- 原田走一郎 2016『南琉球八重山黒島方言の文法』（博士論文）（<https://doi.org/10.18910/55692>）
- 原田走一郎 2024「黒島語の文法」當山善道編著『黒島辞典—黒島の言語・諺・歌謡・習俗—』pp.22-36、編集工房東洋企画
- 平山輝男、大島一郎、中本正智 1967『琉球先島方言の総合的研究』 明治書院.
- 前新 透 2011『竹富方言辞典』南山舎
- 宮城信勇 2003『石垣方言辞典』沖縄タイムス社*
- 与儀達敏 1934「宮古島方言研究」井上史雄・篠崎晃一・小林隆・大西拓一郎編 2001『琉球方言考 7 先島（宮古・八重山他）』ゆまに書房
- ローレンス・ウエイン 2003「多良間方言の系統的位置」沖縄文化協会編『世界に拓く沖縄研究』 第 4 回「沖縄研究国際シンポジウム」実行委員会
- Jaros, A. (2015). Nikolay Nevskiy's Miyakoan dictionary: reconstruction from the

manuscript and its ethnolinguistic analysis. Unpublished doctoral dissertation, Adam Mickiewicz University.

Pellard, T. (2009). *Ōgami: Éléments de description d'un parler du sud des Ryūkyū*. Unpublished doctoral dissertation, Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales (EHESS).

Pellard, T. (2015). The linguistic archeology of the Ryukyu Islands. In H. Patrick, M. S hinsho, & S. Michinori (Eds.), *Handbook of the Ryukyuan languages: History, structure, and use*. De Gruyter Mouton. pp. 13–37.

* 「大琉球語辞典」 (<https://ryukyu-lang.lab.u-ryukyu.ac.jp/>)